

山形における江戸時代の書籍流通について —往来物資料の出版地域からの検討—

On the distribution of the books in the Yamagata region at the Edo era :

Research on "OURAIMONO" documents in consideration of a publication area

郡 千寿子*

Chizuko KOHRI*

要 旨

山形における近世江戸時代の書籍の流通状況について、往来物資料の出版地域を通して考察検討した。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世江戸時代には様々な種類のものが出版され、東北地方にもそれらの所蔵が確認されている。本稿では、特に山形県立博物館の教育資料館に所蔵されている文献資料を中心に出版地域別に分類整理した結果を提示した。特徴的な傾向をみるために、同じ山形県内の日本海地域にある酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料との比較を試み、その共通性と相違性についても言及した。山形県下においては、日本海沿岸部と内陸部における書籍の流通事情が相違しており、日本海域では関西文化の影響が大きく、内陸部では江戸文化の影響が大きかったらしいとの結果が得られた。出版地域に焦点を絞っての検討を通して、江戸時代の東北地方における、文化の流入や定着の傾向を考えようとしたものであり、今後の研究基盤になるものといえる。

キーワード：山形、酒田、往来物、出版、書籍流通、庶民教育

1 研究の方向性について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究¹⁾をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であり、近世江戸時代には様々な種類のものが出版されていた。日本社会の近代化にも大きく影響を与えていたと思われるが、文献資料の基礎的研究をはじめとして、その発掘も未だ十分にはすすんでいない現状にある。そうしたことをふまえて、東北地域の往来物資料調査を通して、近世期の庶民生活の一面や教育的背景について考えてみたいと思っている。

本稿では、山形県の県立博物館の教育資料館所蔵の文献資料調査から、どういった地域で作成された往来物が残存しているのかについて紹介し、分類と整理²⁾

を試みた結果を提示した。本調査に先立ち、すでに弘前市立図書館、八戸市立図書館、岩手県立図書館、秋田県立図書館、酒田市立光丘文庫が所蔵する往来物資料についての文献調査³⁾を行なっている。原則として、写本は除き、版本に限って、成立時期や出版元を確認し、それらを目的別と出版地別に分類整理して所蔵資料の諸特徴について考察検討を続けている。

写本を除いたのには意味がある。この研究の大きな目的のひとつは、地方における近世期の庶民生活について、出版文化を通して考えてみることである。写本はもちろん、その資料の内容を知るには重要な資料であるが、どこでどのような文献が出版され、それがどのような場所で使われてきたか、文化や教育の流通状況を解明するためには、版本の方がより大きな資料的価値をもつと考えたからである。すべてを詳細に検討するよりも、大要を明らかにするために調査資料をより限定して考察検討する方法をとった。

*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

基本的には、従来の調査手法を踏襲し、山形県立博物館の教育資料館所蔵の往来物資料を調査することにし、分類整理⁴⁾を試みた。また、他地域における調査研究—特に酒田市立光丘文庫所蔵の調査結果—との比較検討を通して、山形県立博物館教育資料館所蔵資料の特徴的な一面について明示してみたい。それぞれの地域における往来物資料の調査結果を基礎として、今後、地域の教育環境や文化特性などの考察検討につなげてゆきたいと考えている。

2 近世期江戸時代の出版文化について

江戸時代は、出版文化が盛んとなった時期⁵⁾であるが、その果たした役割は大きかったといえよう。一般庶民層が書籍を享受できるようになった背景には、いくつかの要素があったと思われるが、ひとつは印刷技術の発達であり、ひとつは書肆の活躍による、読者層の広がりであったと考えられる。そして、教育的な基盤が出来つつあったことにも影響され、往来物といういわゆる教科書は、安定的に受容が見込める商品として出版する立場からは人気があったのであろう。

近世期江戸時代、庶民層にまで浸透していった書籍の流通過程と、それをなした社会的背景が、現在の近代日本の知的水準の基礎になっていることは間違いないであろう。それぞれの身分や必要に応じた教育が書籍を通じてなされ、また学ぶ姿勢をもった多くの庶民層の存在が、近世江戸時代に旺盛となった往来物という文献資料の多様性につながっているのである。

東北地方に所蔵されている往来物資料の調査から、どういったことが知り得るのか、といえ、当時の人々がどういった書籍で学習していたか、という実態を知らせてくれる教育的な側面を知るとい価値だけではない。その文献資料がどこでだれによって作成されたものであるか、つまり出版の地域や作成者を確認することによって、知識階層の様相を知ることができ、書籍の流通状況が推測できる、という意味においても有用である。そしてそれは、出版というひとつの文化が広がってゆく一過程を知ることにもつながるといえよう。

残存している往来物資料からの分析は、あくまでその傾向や予測を示すにすぎないが、試みのひとつとして、本稿では、山形県立博物館教育資料館に所蔵されている、往来物資料の出版地域について確認し、分類整理した結果を提示することとした。

3 山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料について

3-1 出版地別分類の状況

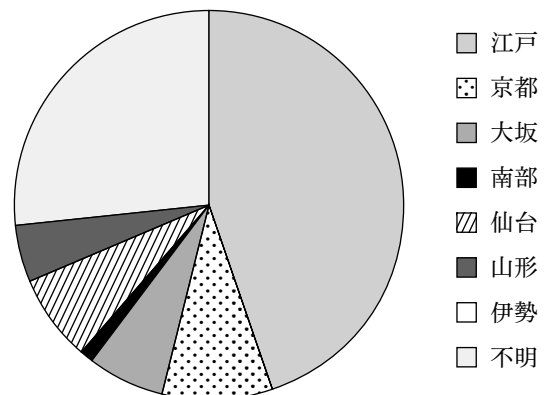
山形県立博物館教育資料館（以下、教育資料館と略称する）所蔵の往来物資料と判定した近世期版本は、総数109本であった。他にも、近代明治期以降に出版された往来物資料や書写本を含むとすると、かなりの所蔵数が確認される。それぞれの詳細な書誌調査と内容分析は、今後の課題であるが、山形や仙台で出版作成された文献資料が確認できるなど、いくつかの特徴を見いだすことができた。

ここでは特に出版地域別に分類した調査結果を紹介し、そうした視点から考察検討をすすめてみたい。出版地域別に分類した結果は、次の通りである。

出版地域のうち、最も多かったのは、江戸（東都も含む）で49本であった。次いで京都の10本、仙台が8本、大坂が7本、山形が5本、南都が1本、出版地の確認できない資料が29本であった。以下に全体に占める割合と本数、およびグラフ化したものを【図1】として示しておく。

【山形県立教育資料館出版地別分類】

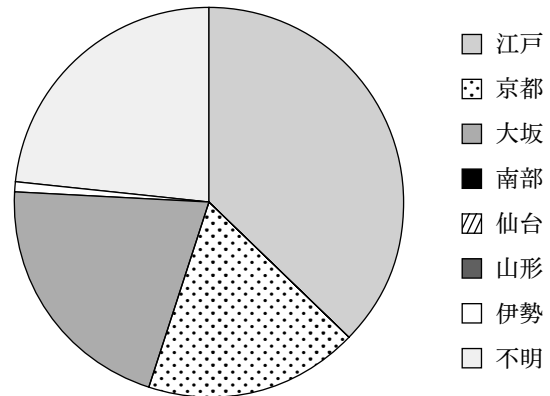
江戸	49本	45.0%
京都	10本	9.1%
大坂	7本	6.4%
南都	1本	0.9%
仙台	8本	7.3%
山形	5本	4.6%
不明	29本	26.6%



【図1 山形県立博物館教育資料館所蔵資料における出版地別分類割合】

注目すべきは、仙台と山形、そして南都（奈良）の出版が確認できたことである。また出版地域の特定できない未確認不明の割合が多いことにも気づかされる。これはかなり傷んだ資料が多く、最終丁の奥書が確認できないものが多かったこと、また書肆や版元の記載そのものがない資料が存在していることにもよる。実際に使用された形跡の多い文献が多数であることを示した一面ともいえるかもしれない。

【図1】には、円グラフでその割合を示したが、後掲の【図2】酒田市立光丘文庫と比較すれば、その相違がより明確になるとと思われる。



【図2】酒田市立光丘文庫所蔵資料における目的別分類割合

3-2 酒田市立光丘文庫所蔵資料の出版地別分類

この出版地別の分類による所蔵状況を少し、他地域の調査結果と比較して検討しておきたい。同じ山形県ではあるが、日本海沿岸の酒田市にある酒田市立光丘文庫（以下、光丘文庫と略称する）に所蔵された近世期の往来物資料について調査した結果⁶⁾を参照してみたい。光丘文庫における調査では、総数163本の所蔵が確認され、それら資料を出版地別に分類整理すると次に示すような結果となった。

出版元が確認できたものは125本であり、確認できない資料が38本であった。125本のうち、多い順に紹介すると、江戸が61本、大坂が34本、京都が29本、伊勢松阪1本であった。割合も示すと次のようになる。

【酒田市立光丘文庫出版地別分類】

江戸	61本	37.4%
京都	29本	17.8%
大坂	34本	20.9%
伊勢	1本	0.6%
不明	38本	23.3%

江戸が最も多く61本である。次いで大坂34本、京都29本ということになる。ただし、大坂京都を関西文化圏としてまとめて考えると、63本となり、江戸の61本を上回る数になる。つまり、光丘文庫所蔵の往来物資料は、関西で出版されたものが江戸出版のものとはほぼ拮抗しているといえることができる。【図2】にグラフ化して示しておく。

3-3 教育資料館と光丘文庫の所蔵資料の比較

山形県立教育資料館の所蔵状況の調査結果を酒田の光丘文庫と比較すると次のようにまとめることができるであろう。総数については、酒田市立光丘文庫が163本とかなり多いのであるが、教育資料館も109本と少ないわけではなく、それぞれに近世期の版本としての往来物の所蔵が確認できた。

そして、出版地別に分類してみた結果を比較すると、大変興味深い点が明らかとなった。教育資料館も光丘文庫も、最も多い出版地は江戸であり、江戸からの影響が大きかったらしいことが予想される。しかし、光丘文庫では、江戸が多いとはいえ、京都の29本と大坂の34本を合わせると63本となり、江戸の61本を上回るのであった。つまり、上方関西圏からの影響という意味では、江戸に拮抗しているとも考えることができるであろう。加えて、光丘文庫では、教育資料館には複数確認できた、仙台と山形で出版された文献資料を見ることはできなかった。

内陸部の山形に所在する教育資料館が、地元の山形で出版された資料を有し、また隣接する仙台で出版された資料をも有しているのと対照的に、日本海沿岸部の酒田に所在する光丘文庫では、もっぱら、大都市の江戸と上方の大都市、京都と大坂からの資料で占められていたということになる。つまり、所蔵資料の出版地域からの考察検討によれば、光丘文庫では、上方関西圏からの影響が大きかったらしいことが知られるのであった。

山形や仙台という地方で出版された資料が教育資料館には所蔵が確認でき、しかも、教育資料館では、京都大坂南都を合わせても、18本であり、江戸の49本には遠く及ばない。一方、山形と仙台を東北とまとめる

とすれば、合わせて13本となるため、関西の18本に及ばないにしても、地元で出版された資料が少数であったということにはならないであろう。つまり、教育資料館の資料からは、上方関西圏の流入は少なく、江戸と地元東北の影響力化にあったと考えることができるのではないだろうか。

出版地域に焦点を絞って、山形市にある教育資料館と酒田市にある光丘文庫の往来物資料を分析してみた。日本海沿岸にある光丘文庫は、仙台、山形といった東北文化圏で出版された資料は存在せず、上方関西文化圏で出版された資料が多く流入していたらしいことが確認された。

他方の教育資料館では、地元東北の山形や仙台と、大都市江戸で出版された資料が多数であることが確認できたといえよう。【図3】に出版地域ごとに教育資料館と光丘文庫の所蔵資料数についてまとめてみた。

4 出版地域による往来物資料の紹介

ここでは、教育資料館における所蔵資料について少し紹介しておきたい。文献資料の書誌、刊年や出版年、内容面などの詳細については別稿に譲ることにし、出版地域の分類にそって書名を中心に紹介する。

江戸（東都と記載されたものも含む）と分類した資料は総数49本を数え、最多であり、江戸で出版された文献の流入が多かったことが知られる。

『大全古状万歳楽』には「嘉永二 東都 山口屋藤

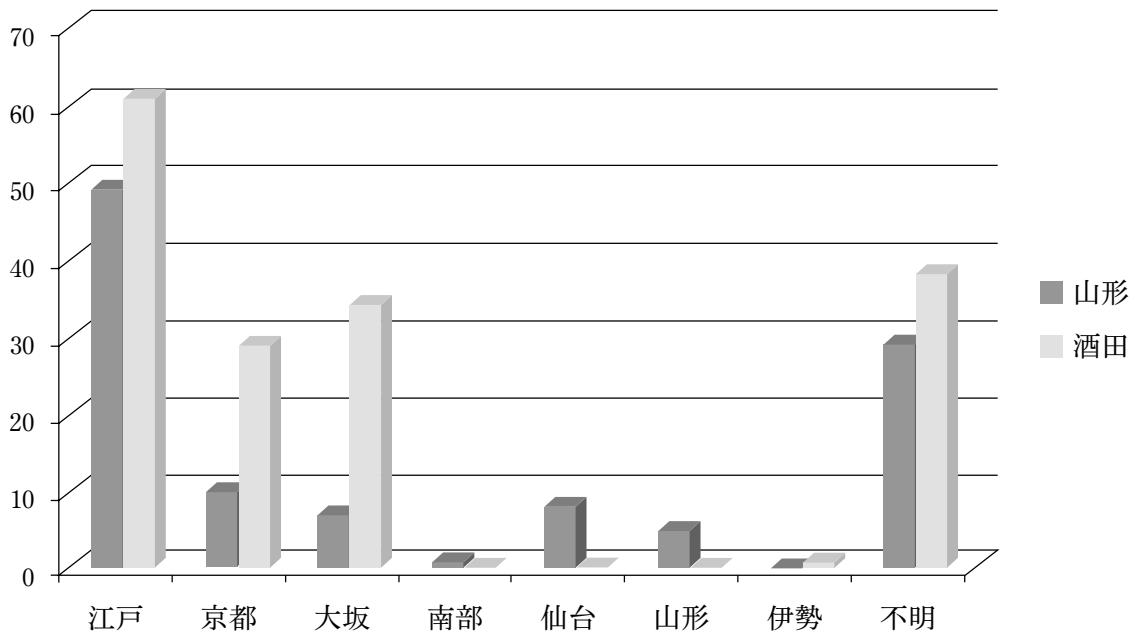
兵衛」、『古状揃大成』には「東都地本問屋 藤岡屋慶次郎 大和屋惣右衛門」とあり、こうした消息科往来ほか、多数の文献が江戸で出版されたものであることが確認できた。女子用往来の『女文用宝箱』には「江戸 東都書林 須原屋茂兵衛 山城屋佐兵衛」の名前が確認でき、社会科往来では、『御成敗式目』に「天明四 江戸馬喰 永壽堂西村屋与八蔵板」とあった。

京都に分類した資料は10本であり、江戸に次ぐ数であるが、大坂7本、南都1本を含めて関西圏からの文献資料の流入は、酒田市立光丘文庫所蔵資料に比してはかかなり少ないことが知られるといえよう。たとえば『女今川姫鑑』には「京都 宝暦一三 京寺町菊屋七郎兵衛」、『教乃小づち』に「寛政二 京師書林 八文字屋正兵衛」とあった。

『商売往来』には「堀川流水軒 大坂心齋橋」、『商売往来絵字引』には「大坂書林 河内屋茂兵衛 伊丹屋善兵衛」と確認できた。

南都は1本だけであるが、貴重な名所案内のひとつである『南都名所記』で「宝暦四 嘉永五改版 南都大仏西門前 絵図屋庄八版」と記載が確認でき、注目されるものである。

特に教育資料館所蔵資料の中で特徴的なこととして、隣接の仙台、そして地元山形で出版された文献資料が確認できたことが挙げられる。しかも仙台が8本、山形が5本と多数の所蔵がみられることが注目される。仙台と分類した資料には、『女今川』に「仙台 菅原屋安兵衛板」、『女今川』に「仙台国分町 池田



【図3 教育資料館・光丘文庫所蔵資料 出版地域別分類による所蔵資料数】

屋源口 本屋治右衛門、『春夏読之文』に「仙台伊勢屋 安和九」とあるなど、複数の出版元の記載がみられた。

山形という地元の出版が確認されたことも重要であり、『手紙之文書』は題箋がない資料だが「天保十羽州山形十日町北条中兵板」との記載がみられた。教訓科往来である『実語教童子教』には「羽州山形 北條忠兵衛」、『実語教』には「文政五 山形書林 玄樹堂黒木屋太右衛門」とあった。これらの記述は、江戸京都大坂以外の地方出版の研究上⁷⁾、有益な情報となりうると思われる。

教育資料館は、山形市内の中心地に所在していることもあって、山形仙台という東北で出版された資料が複数みられた。また江戸で出版された資料の流入と影響が大きかったことも確認できるといえるだろう。酒田市立光丘文庫との比較においては、出版地域においても、その偏在を提示できたと思われる。

5 まとめにかえて

山形県立博物館の教育資料館に所蔵されている往来物資料について、出版地域別に分類整理し、その調査結果を報告しつつ考察分析してきた。今回、調査対象であった近世期の版本である往来物資料は、109本を数えたが、それらの出版地域別の状況をグラフ化することで特徴を明示できたと思われる。

本稿では、内陸部である山形県立教育資料館所蔵の資料について紹介するとともに、特に比較対象として、日本海沿岸の酒田市立光丘文庫所蔵の資料についても検討し、両地域における、出版地域別分類の相違点と共通性について言及した。出版は、江戸時代における特徴的な文化のひとつであり、その地域性に注目して分類することで、同じ山形県とはいえ、日本海沿岸と内陸部では、書籍の流通にも相違があったらしいことが知られたのである。

教育資料館においては、仙台で出版された文献資料が確認できることや他地域では所蔵がみられなかった山形で出版された資料が確認されるなど、注目すべき調査結果が得られた。関西圏で出版された資料は少なく、江戸や地元山形からの影響が大きかったらしいことが明らかとなった。他方、日本海沿岸の酒田では、江戸の出版物も多いとはいえ、大坂や京都といった関西圏で出版された資料の所蔵がかなりの割合を占めていた。酒田においては、江戸からの影響とともに関西地域との文化的な関わりが大きかったらしいことが確

認できたのであった。

近世江戸時代の京都は、商業出版の先進地であり、大坂も含めて関西圏を中心に出版文化は隆盛となっていた。次第に江戸にもその影響が波及していき、地方での出版も行われるようになってゆく。そして関西圏発祥の出版文化は、北前船といわれる日本海海域を往来する海上交流によって、内陸部の山形よりいち早く、日本海沿岸の酒田に書籍流入という形でもたらされたと考えることができるのではないだろうか。

出版地域という限定的な側面からの検討結果であるが、ひとつの傾向として、以上のようにまとめてみた。文化的背景や教育環境などの地域特性について、また往来物の資料的価値や内容面からの考察など、残された課題については、今後も研究を続けたいと思う。

注

- 1) 拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考—近世期の京都観—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月)、拙稿「往来物の「女ことば」について」(『関西文化研究叢書10巻』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年11月)、拙稿「近世期における「御所ことば」の記載について—東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月)、拙稿「国語資料としての『都花月名所』—江戸時代後期における漢字表記と振り仮名」(『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月)等参照。
- 2) 分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)を参考とした。
- 3) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について—関西文化との関係から—」(『関西文化研究叢書 往来物の研究 第1輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月)、「岩手県立図書館所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月)、「八戸市立図書館 旧遠山家所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月)、「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月)、「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料—目的と出版地からの分類分析—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月)等参照。
- 4) 拙稿「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料—

目的別分類からの考察一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月)参照。

- 5) 長友千代治著『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、2002年)、鈴木俊幸著『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)、市川寛明・石山秀和著『江戸の学び』(河出書房新社、2006年)等参照。鈴木俊幸氏のご研究によれば「寛政期(一七八九～一八〇一)を境にして、知と情報のありようが大きく変化していくように思われる。」(『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)17頁参照)という。
- 6) 拙稿「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料—目的と出版地からの分類分析—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月)参照。
- 7) 地方出版の研究には、大田正弘著『尾張出版文化史』(六甲出版、1995年)、須山高明「近世紀州の『書商』

(『和歌山地方史研究』第38号、2000年)、鈴木俊幸「地方の本屋さん——たとえば高美屋甚左衛門」(『国文学』42巻11号、1997年9月)等がある。

付記

貴重な文献資料の閲覧許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、山形県立博物館教育資料館および酒田市立光丘文庫の関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

本研究は、平成24年度 科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号23520541)の研究助成による研究成果の一部である。

(2013. 1. 7 受理)